

学部留学生に対する日本語教育改革試案 —プレイスメント・テストの試行と中級日本語クラスの報告—

小川 誉子美
丸山 千歌
奥野 由紀子

【キーワード】 教養教育 2006 年度改革案、学部留学生、
統一プレイスメント・テスト、日本語 I 中級、学部との協力体制

0. はじめに

留学生センターでは、2003 年から、学部留学生の入学時の日本語力を測定し、レベル別日本語クラスに振り分けるための日本語科目履修指導を行ってきた。小川・丸山・奥野（2004）では、日本語力の実態、及び、履修指導で明らかになった留学生の日本語科目履修に関する課題等を報告し、今後への提案を行った。今回は、この提案にもとづき実施したいくつかの試みについて報告し、あらたな検討事項について述べる。

教養教育 2006 年度改革案には、日本語科目の履修に関する留学生センターの提案も含まれる。本稿は、改革案の背景説明も兼ねるものである。

1. 前回の提案とその後のとりくみ

本節では、本報告の背景として、日本語科目の再編について、小川・丸山・奥野（2004）が行った 4 つの提案事項の概略とその背景、また、2006 年度改革案との関わりについて述べる。

1-1. プレイスメント・テストの義務化

学部留学生の入学者選抜方式は、私費留学生、国費留学生、政府派遣留学生などの間で異なるため、留学生センターでは、同一の試験で入学時の日本語力を測定し、レベル別日本語クラスを設けている。

私費留学生の選抜が、日本語能力試験から日本留学試験の結果が用いられるようになった時期から、特に、日本語力のばらつきが不規則に現れるようになり、それま

で、日本語のクラス内で行っていたプレイスマンとテストを 2005 年度には、試験的に入学直後に一斉に実施した。試験問題の作成とテスト実施の経緯に関しては、第 2 節で詳しく述べる。

1-2. 中級者の外国語科目選択に関する規定についての検討

前回の報告では、日本語科目履修指導の際に、特に中級者と判定された者の中に、時間割上履修が可能だが日本語以外の外国語を選択した者が若干名いたことを報告した。学部の授業を遂行するために必要と思われる日本語力が明らかに不足しているにもかかわらず、日本語科目以外の外国語科目を選択した理由の一つに、「よい成績取得のため」という答えがあった。母語に近い言語を履修すれば、日本人学生と競って優位となれ、成績の面でも優位であると判断しての科目選択であった。こうした日本語科目履修が必要な留学生に対しては、以前から日本語科目を必修にすることが学内でも指摘されてきた。今年度の中級者の日本語科目の履修状況も含め、日本語 I 中級クラスの内容については第 3 節で詳しく述べる。

1-3. 履修年次等の規定についての検討

現在の日本語科目に関する規定は、日本語 I は 1 年次で、日本語 II は 2 年次以降で履修するというものである。しかし、1 年次に履修できず、3・4 年次に履修するケースがあるということに対し、前回の報告では、日本人にとっての外国語科目と異なり、入学時から日本語で大学生活を行うため、日本語力が不足している場合は、1 年次前期に多く履修するなど履修年次に規定を設ける必要性があることを指摘した。これについては、留学生センターで検討し、2006 年改革案に生かした。これについては、第 4 節において述べる。

1-4. 中級者の日本語履修科目数についての検討

中級者が中級者向け日本語科目のみを履修して、日本語科目履修修了とすることが適切かどうかという点を指摘した。つまり、到達度という点から、中級者は上級者より多くのコマ数を履修する必要があるが、中級者に上級者や日本人学生以上の負担を課すことは現実的ではないということから、方法としては、他の科目との振り替えを可能にするなどの個別の措置が必要であることを述べた。これに関しては、

第4節において述べる。

教養教育2006年度改革案は、以上の提案をもとに議論し発展させたものである。本稿では、次節以降、2004年度の提案を受け、2006年度改革案作成に向けて、留学生センターで実施してきた内容を報告するとともに、改革案の内容と今後の検討事項について述べたい。

2. プレイスメント・テストの開発と試行

2-1. 統一プレイスメント・テスト試行までの経緯

多様化する学部留学生の日本語力への対応策として、留学生センターは2004年度に「日本語I中級」を新設した。新科目開設に伴い必要になったのは、日本語力による学部留学生のレベル分けである。

2004年度は、これへの緊急の対応として、留学生センターが実施している全学講習プログラムのプレイスメント・テスト¹を用いて学部留学生を対象とした日本語力判定テスト（以下、プレイスメント・テスト）を実施した。プレイスメント・テストの周知については、各学部の留学生担当教員に協力を要請し、留学生オリエンテーションでは留学生センターの教員が学部留学生に直接呼びかけを行った。その結果、学部新入留学生60名のうち48名、つまり学部新入留学生の8割が受験し、そのうちの3分の1の16名が中級レベルであると判定され²、「日本語I中級」の履修を促す日本語科目履修指導を受けた。

初めての試みとしては一定の成果が上げられたものの、プレイスメント・テストの受験者が学部新入留学生の8割にとどまったことにより、学部留学生の日本語力の全体像を捉えられないことのほかに、実際には集中的な日本語学習を必要としながら日本語科目を履修しない学部留学生との接触の機会を持つのが困難で履修指導さえままならないという課題が残った。

そこで、留学生センターの全学教育部会委員³は、2004年5月25日の全学教育部会で、プレイスメント・テストの実施と「日本語I中級」履修指導に関する報告を行い、その中で、「日本語I中級」を、今度見込まれる留学生の日本語力の質の変化への対応に根本的につなげていくための課題の1つとしてプレイスメント・テストの義務化を訴えた（門倉、2004a）。

2006年度からは、全学的に新しい教養教育カリキュラムが始動する。留学生セン

ターでは、このタイミングに合わせて、留学生の日本語力の質の変化への対応態勢を整えるために、プレイスメント・テストの実施態勢の整備を進めることにし、2005年度にプレイスメント・テストが試行できるよう準備を進めた。

2-2. プレイスメント・テスト開発の方針と流れ

プレイスメント・テストの義務化は、まず留学生センターの提案として全学教育部会の拡大ワーキング・グループで話し合われ、次に全学教育部会で審議、学部の了承を得て決定される事項である。留学生センターでは、全学教育部会の拡大ワーキング・グループに提案する内容を具体化していくため、2004年5月末に日本語教育部門の中に、新カリキュラムの素案作りを主な任務とする日本語教育カリキュラム改革ワーキング・グループ⁴を編成し、ワーキング・グループでの話し合いの結果を日本語教育部門会議で審議するという形で話し合いを進めてきた。

6月下旬には、プレイスメント・テストの実施体制の概要が以下のように決定した（日本語教育カリキュラム改革WG、2004）。

- ① 学部留学生にはプレイスメント・テストを義務化する。
- ② 実施は入学後のできるだけ早い時期とする。
- ③ 所要時間は1.0-1.5時間とする。

さらに、10月下旬に

- ④ テストは文法・聴解問題（全学講習日本語コースのプレイスメント・テストとの共通問題とする）と、読解問題、漢字語彙問題の3種類とする。

が決定した（日本語教育部門教務委員⁵、2004a）。文法・聴解問題を全学講習日本語コースのプレイスメント・テストとの共通問題とすることを選択したのは、研究生・大学院生などの日本語力などを参照できる利点を生かすという理由からであった。

2005年度のプレイスメント・テストの試行の成否に関わる課題は2つあった。一つは日本語中級レベルと上級レベルとを判定するテスト問題の開発である。2004年度は暫定的に全学講習日本語コースのプレイスメント・テスト、つまり初級から上級までを判定するテストを用いたが、学部新入留学生対象のテストは中級と上級を的確に判定する特徴を持たせることが必要となる。もう一つは学部留学生全員の受験で、これはプレイスメント・テストの受験の義務化と深く関連する。以下、この2つについて述べる。

2-3. プレイスメント・テスト開発の流れ

11月2日の日本語教育部門会議では、プレイスメント・テスト開発プロジェクトチームの立ち上げとその後のスケジュールが決定した（日本語教育部門教務、2004b）。

2004年	11月初旬	(1) プレイスメント・テスト問題開発の方針の決定 (2) 非常勤講師に対するプレイスメント・テスト開発への協力要請
	11月中旬	プレイスメント・テスト開発プロジェクトチーム立ち上げ
	12月	各学部への協力依頼
2005年	1月	草案検討 実施日程決定、会場確保、実施要領作成、実施担当者決定
	2月	テスト問題完成
	3月	実施準備
	4月	実施、採点、レベル判定、 各学部への報告、履修指導の協力依頼

プレイスメント・テストは、概ねこのスケジュールに沿って開発された。各テストの概要は表1のようになった⁶（日本語教育部門教務委員、2004b）。

表1 プレイスメント・テストの概要

	目的	所要時間
文法・聴解	初級～上級のレベル判定	30分
読解	中級～上級のレベル判定	40分
漢字・語彙	中級～上級のレベル判定	20分

この他採点にあたっては、マークシートで採点することとした⁷。

2-4. プレイスメント・テスト試行に向けた働きかけ

2006年度のプレイスメント・テストの義務化に向け、今回の試行を成功させるもう一つのポイントは、プレイスメント・テストの実施時間の確保と周知であった。2004年度で言えば、入学式は4月5日（火）である。この日から教養教育科目開講

日の4月11日(月)までの正味3日間でプレイスメント・テストを実施し、レベル判定と結果の周知を行うためには、各学部の協力と、各新入留学生への働きかけが必要である⁸。

各学部への働きかけとしては、全学教育部会委員が2004年12月の全学教育部会で、平成17年度学部留学生新入生統一日本語プレイスメント・テストの実施に向けた協力依頼を行った(門倉、2004b)。依頼内容は、(1)新学期開始時期の学部オリエンテーションと健康診断のスケジュールの若干の調整、(2)各学部で実施されるオリエンテーション時に、留学生新入生に統一プレイスメント・テストの日時を周知することの2点である。特に、プレイスメント・テストの実施日時の調整には工夫が必要であった。学部の新入生対象のオリエンテーションの開催日時は、学部・学科によって異なるため、全学部の新入留学生が一同に会する時間帯を確保するのは非常に難しいという現状がある。これへの方策として全学教育部会委員が11月頃より各学部で次年度の予定を問い合わせた上で、12月の全学教育部会で各学部へ、統一プレイスメント・テストの実施に向けた調整の依頼をするという手続きをとった。2006年度以降、入学時の統一プレイスメント・テストを実施していくには、テスト実施の意義と必要性についての各学部のさらなる理解と協力を得ることが必要である。

各新入留学生への働きかけとしては、新入留学生に入学式前に送付される入学案内の資料の中に、統一プレイスメント・テストの案内を入れた。さらに、各学部の協力を得て、留学生センター教員が分担し学部のオリエンテーションで、統一プレイスメント・テストの周知を図った。

2-5. テストの実施、レベル判定と結果の通知

プレイスメント・テストは、4月6日(水)16時から17時半にかけて実施した。予備日(4月7日)での受験を含め、66名が統一プレイスメント・テストを受験した⁹。

翌日の午前中に採点と集計とを行い、午後の留学生センター日本語教育部門会議でレベル判定を行った。判定には、プレイスメント・テストの集計結果のほか、受験者の日本語学習に関する背景情報なども参考にした。

この結果、受験者66名のうち、15名が「日本語I中級」を受講すべきレベル、さらに3名が「日本語I中級」の受講を促すレベルであると判定し、次節で詳述す

る履修指導につなげることができた。

3. 「日本語 I 中級」受講者の現状

3-1. 中級者への履修指導

「日本語 I 中級」への履修指導は、プレイスメント・テストの判定結果を留学生センター及び、各学部の事務においてプレイスメント・テスト終了翌日に掲示し、面接の時間帯を設けて、個人ごとに行なった¹⁰。面接に来ない学生に対しては、連絡用として了解の上学生が申告した連絡先や、各学部留学生担当者を通して、プレイスメント・テスト終了後、2日以内に連絡をとった。最終的には「日本語 I 中級」を受講すべき15名と、「日本語 I 中級」の受講を勧めるレベルの3名の、計18名、全ての学生と面接を行い、授業登録の段階まで、必要であれば回を重ねて履修指導を行なった。履修指導は、個人の日本語のレベル、他の時間割との兼ね合いを考慮して行い、学部での全ての勉学の基礎となる日本語を1年次の初めに強化する必要性、「日本語 I 中級」を最低4コマ以上履修することを強く奨励した。

3-2. 「日本語 I 中級」の授業内容

「日本語 I 中級」の授業内容は、学部留学生に必要な日本語力を総合的に身につけることを目的とし、月曜日、火曜日、木曜日の1, 2限に全6コマ開講した。授業は1コマごとに独立して行われ、授業科目をそれぞれ「日本語 I 中級 A, B, C, D, E, F」とし、特にB, C, Fでは「読解」、Aでは「文法」、Dでは「文章表現」、Fでは「口頭表現」を中心とした能力を養う活動を行い、月曜日「A 文法+B 読解」、火曜日「C 読解+D 文章表現」、木曜日「E 読解+F 口頭表現」の組み合わせで実施した。「日本語 I 中級 A, B, C, D, E, F」は、独立した科目ながらも、日本の現代社会の様々な特徴をトピックとした共通のテーマを扱い、関連を持たせて進められるため、出来るだけ多くの科目を同時に受講することとした。教科書は、近藤安月子・丸山千歌(2001)『中・上級日本語教科書 日本への招待』(東京大学出版会)を用いた。それぞれのクラスでは予習が義務付けられ、学期2回の間中テスト、期末テストの他に、予習確認クイズや復習クイズがほぼ毎回行なわれた。また、Dでは作文の提出、Fでは口頭発表が定期的に課され、コース全体を通してアカデミック・ジャパニーズに焦点をあてた個別指導が、課外においても定期的になされた。尚、このク

ラスでは、学部中級者以外に、学部交換留学生、教員研修生、予備教育生の受講も認められた。

3-3. 2005 年度の履修状況とその背景

今年度「日本語 I 中級者」と判定された学生 15 名の履修状況を表 2 に示す。この表から以下の点が明らかとなったと言える。

- ① 3 コマ以上履修できる学生がいない (平均履修コマ数 2.3)。
- ② 履修がゼロの学生がいる。

表2 「2005 年度 日本語 I 中級」 履修状況

学生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
学部	工	工	工	工	工	工	工	済	済	営	営	営	教	済	工
受講コマ数	2	0	3	3	3	3	3	3	2	3	2	3	0	2	3

また、以下のような問題もあった。

- ③ 曜日や時間によっては学部生の受講が少ない。

中級者には、少なくとも 4 コマ以上履修することを勧め、学習指導してきた。しかしながら、今年度の中級日本語履修者のうち、3 コマ以上履修できる学部生はいなかった。因みに、昨年度は 6 コマ (経営)、5 コマ (経済)、4 コマ (工学) とれていた学生もいた (昨年度の平均履修コマ数 2.8) ことから、今年度はさらに減っていることがわかる。この中級者の履修コマ数が減った原因の一つとしては、学部によって今年度から履修基準が変更され、英語の科目ごとにクラス指定がなされたため、1 年次前期に必ず履修しなければならない英語科目と日本語科目が時間割上重複してしまい、日本語科目の履修が更に困難になったことが挙げられる。さらに、工学部においては、2006 年度から、英語科目の履修要件として、EAP (English for Academic Purposes) を内容とする「英語演習」の履修を卒業要件として認めず、EGP (English for General Purposes) を内容とする「英語実習」のみが卒業要件となる。そうすると EGP クラスは 1 年次に集中しているため、「日本語 I 中級」の履修がさらに厳しくなると予測される。学部のほぼ全ての授業を日本語で受講し、

単位をとっていかねばならない学部留学生にとっての日本語は、日本人学生にとっての外国語科目とは位置づけが異なるはずである。特に日本語レベルの向上が必要な中級日本語履修者には、今後英語を含む外国語科目の優先順位を考えていく必要があると思われる。

また、「中級」と判定されたにもかかわらず、「日本語 I 中級」を全く履修しない学生は、第 1 節で 2003 年度の問題として取り上げたのと同様、外国語科目として、日本語ではなく他の外国語を履修していることが明らかとなった。これは学生自身が、日本語よりも単位が取りやすいであろうと個人的な判断を下した結果であるが、学部、留学生センター双方からの学習指導があったにもかかわらず、日本語を受講しないという状況は、今後 4 年間の成績、卒業認定をはじめ、奨学金の受給や就職などあらゆる局面に関わってくる深刻な問題として、憂慮される。

また、曜日と時間帯によっては、受講が難しい場合があることが明らかとなった。各学部の時間割を取り寄せ、検討した結果、中級日本語の時間帯に必修の専門科目が重なり、学部によっては、4 コマ以上の履修は厳しい現状があることが判った。学部からは、留学生が 4 年間で無事卒業するためにも、日本語を履修しやすくするよう心がけているが、現実的には、教養教育で時間帯が決まっているため、専門科目の時間は動かしにくく、時間割が過密で厳しい状況であることも指摘されている。今後、中級者が取りやすい時間に「日本語 I 中級」を設定するよう留学生センター側でも、時間割の配置を検討する必要があると思われる。

4. 2006 年改革案における措置と今後の検討事項

以上、プレイスメント・テストの開発、日本語 I 中級クラスの現状と課題について述べてきた。本節では、こうした流れの中で提案した日本語科目の 2006 年改革案の説明、及び、今後検討を要する事項について述べる。

4-1. 日本語クラスの再編

日本語科目は、I 年次に履修する日本語 I（日本語 I 中級を含む）と、2 年次以降履修する日本語 II を設けていた。2006 年度より、「日本語中級」「日本語上級」「日本語演習」の 3 科目を用意し、内容は次のように規定する。「日本語上級」は、大学での活動に必要な日本語力を養成する科目として、基本的な日本語力を育成するための科目、「日本語演習」は、「日本語上級」を発展させ、社会研究生活に適した

思考力・表現能力の育成をめざすものである。「日本語中級」は上級への橋渡しの役割を持つ。

入学時に受験したプレースメント・テストで上級者と判定された者は、1年次前期から「日本語上級」を履修するが、中級者と判定された者は、1年次前期は、「日本語中級」を受講し、後期から「日本語上級」を受講する。「日本語演習」は中級者・上級者とも1年次後期から履修する。

日本語担当教員が、レベル毎に推奨履修方法として、コマ数とともに日本語科目の履修モデルを作成し、これを入学時のガイダンスで周知させることが必要である。また、学部教員の履修指導への協力を得るためには、日本語履修指導マニュアル等の作成も検討する必要がある。

4-2. 日本語科目の開講時間帯についての検討

全学教育部会であらかじめ日本語科目の開講時間帯を周知し、教養外国語科目の時間帯（1・2限に開講）に関し、一部の学部から協力を得た。しかし、日本語履修平均コマ数が減少した。これは、一部の必修科目との時間帯が重なったことがあげられる。今後は、今まで開講してこなかった夕方などの遅い時間帯での開講も検討していきたい。

4-3. 中級者に対する日本語科目必修案についての検討

日本語科目の履修が必要な者があえて履修をしないという現実には、現行の規定では問題がないため、依然としてあり、日本語教員の指導のみでは、日本語履修を実現に導くことは不可能である。中級者に日本語科目の履修をうながすには、規定を変更する以外に方法はない。

日本人学生にとっての外国語科目選択に関する規定と、留学生にとっての第二言語としての日本語科目に関する規定は、同一である必要はなく、また、中級者に対し、日本語科目を必修科目に認定する案については、全学での協議の場でも議論された。これを実現するには、留学生の受け入れ部局である学部によって、全学の場で議論されるのが望ましい。それまでの経過的措置としては、留学生センターが各学部の協力を得て、留学生に対し個別に日本語科目の履修を奨励していきたい。また、各学部においても、今以上にガイダンス等の場で伝えていただきたい。

4-4. 日本語科目の履修コマ数と特別措置についての検討

中級者が上級者と同じ単位数の履修で十分かという点に関し、留学生センターで検討した結果、上級者には6単位を、中級者には、中級日本語4単位分を加算した10単位の取得をめざした履修モデルを提示し指導していきたいと考えている(表3参照)。しかし、外国語科目の履修規定は学部や学科により異なり、1外国語4単位以上、8単位以内というものが多く、中級者が10単位を取得することは、卒業に必要な単位数を上回るもので、日本人学生より多くの負担を与えることになってしまう。この解決策として、前回提案と同様に、中級者に限り、他の外国語科目等への振り替えが各学部で検討されるということが必要であろう。これに関しては、留学生の受け入れ部局である学部、及び、全学での協議の場で議論されたい。

表3 履修方法奨励案

	中級者	上級者
1年次前期	日本語中級 4コマ	日本語上級 2コマ
1年次後期	日本語上級 4コマ	日本語上級 2コマ
2年次	日本語演習 2コマ	日本語演習 2コマ

5. 終わりに

教養教育2006年改革において、日本語科目の再編を行うが、プレイスメントとテスト実施や履修指導に対する協力等に対し、各学部の理解と協力を得て、日本語力の養成に対応していきたい。

今後、入学時の日本語力が多様化しつつある現状に対応するには、学部留学生の受け入れ部局である各学部からも問題点が提起され、全学の場で議論されることが本来の姿でもあり望ましいと考える。特に、本論4節4)で指摘した中級者の日本語科目の他の外国語科目等への振り替えの問題は、前回の提案事項でもあるが、今後各学部で議論されたい。留学生センターはそれに積極的に対応していきたい。

本稿は、0節、1節、4節、5節は、小川誉子美、2節は、丸山千歌、3節は、奥野由紀子が執筆した。

注

- ¹ 全学講習日本語コースでは、毎学期初めに実施しているもので、初級から上級までを判定する簡易テストである。学部留学生対象のレベル判定テストは初めての試みであったことがあり、レベル判定に際して参照すべきデータが必要であったため、6年の実績があるこのテストを活用した。
- ² 日本語に関する背景情報も参考にして判定した。
- ³ 2004年度から2005年度にかけての留学生センターからの全学教育部会委員は門倉正美教授である。
- ⁴ 構成メンバーは、四方田千恵教授、丸山千歌助教授、奥野由紀子講師の3名である。
- ⁵ 各テストは以下の構成員が草案を作成した。
文法・聴解：四方田千恵教授、小川誉子美教授、清水知子非常勤講師、梅岡巳香非常勤講師、読解：吉田昌平教授、丸山千歌助教授、金庭久美子非常勤講師、ヨフコバ四位エレオノラ非常勤講師、白鳥智美非常勤講師、漢字・語彙：丸山千歌助教授、奥野由紀子講師、樋口万喜子非常勤講師、加藤紀子非常勤講師
テスト開発プロジェクトチームの構成員は、草案作成者と門倉正美教授（2004年度教務委員、全学教育部会委員）である。
- ⁶ 各テストは以下の構成員が草案を作成した。
文法・聴解：四方田千恵教授、小川誉子美教授、清水知子非常勤講師、梅岡巳香非常勤講師、読解：吉田昌平教授、丸山千歌助教授、金庭久美子非常勤講師、ヨフコバ四位エレオノラ非常勤講師、白鳥智美非常勤講師、漢字・語彙：丸山千歌助教授、奥野由紀子講師、樋口万喜子非常勤講師、加藤紀子非常勤講師
テスト開発プロジェクトチームの構成員は、草案作成者と門倉正美教授（2004年度教務委員、全学教育部会委員）である。
- ⁷ マークシート専用機を必要としないSCANET Sheet システム（株式会社 ネットシステムズ）を導入した。
- ⁸ 2004年度の全学教育部会委員の門倉教授が中心となりこの課題に取り組んだ。
- ⁹ 新入予定の留学生数は67名であった。したがって2005年度は新入学部留学生のほぼ全員がプレイスメント・テストを受験したことになる。（2005年度教務委員の奥野講師確認）

- ¹⁰ 履修指導は、今年度「日本語 I 中級」担当者、小川誉子美教授・奥野由紀子講師が行った。

参考資料

- 小川誉子美・丸山千歌・奥野由紀子 (2003) 「学部留学生の日本語力に関する報告—中級者に対する試みと提案」『横浜国立大学留学生センター紀要』第 11 号
- 小川誉子美・奥野由紀子・樋口万喜子「日本語 I 中級 ABCDEF シラバス」2005 年 4 月
- 門倉正美 (2004a) 「2004 年度前期日本語プレイスメント・テスト (PT) 実施および「日本語 I 中級」履修指導に関する報告」2004 年 5 月 25 日、全学教育部会提出資料
- 門倉正美 (2004b) 「平成 17 年度 学部留学生新入生統一日本語プレイスメントテスト実施について」2004 年 12 月 21 日全学教育部会提出資料
- 近藤安月子・丸山千歌 (2001) 『中・上級日本語教科書 日本への招待【テキスト】』東京大学出版会
- 日本語教育カリキュラム改革 WG (2004) 「日本語教育カリキュラム改革案」2004 年 6 月 22 日日本語教育部門会議提出資料
- 日本語教育部門教務委員 (2004a) 「日本語教育部門会議資料」2004 年 10 月 26 日
- 日本語教育部門教務委員 (2004b) 「日本語教育部門会議資料」2004 年 11 月 2 日